

看護用品の解説

入院患児の哺乳瓶の消毒器として市販の蒸し器が使われていた。

看護用品にまつわるエピソード

1970（昭和 45～46）年にかけて政府立那覇病院の小児科病棟は新任の小児科医とまた中部病院より着任した若い外科医達を迎え、活気に満ちていた。それまでの治療に加えて保育器を使用していた未熟児の治療や新生児および乳児の手術も行われるようになった。それにつれて術後経過に影響を及ぼすと考えられる感染予防、栄養管理、水分出納など児の全身管理を看護婦が積極的に行わなければならない必要性があった。当時、病院による調乳は新生児のみであった。小児科病棟での乳児の授乳は母乳に任せていた。そこで、小児科病棟においても調乳は栄養室へ、消毒は中央材料室で行うよう依頼したが余裕がなく無理という返事であった。それならばと配膳室の一角に清潔と考えられる場所を設定し、物品は市販の蒸し器、乳首煮沸用ナベ、メヨートレイ、滅菌消毒用小タオル、ピンセットを準備するようにすると、調整粉乳は栄養室より配布されるようになった。看護助手に手洗い、哺乳瓶、乳首の洗浄および消毒法、ミルクの作り方を指導した。その後は、主に看護助手がミルクを作るようになったが、母親の指導も行い母親が作る児もいた。また看護実習生も実習として行った。看護婦は医師と相談をしながら乳児の体重と目標カロリーよりその児の 1 日哺乳量を算出した。1 日に必要な哺乳量を乳児に与える必要性から乳児の状態観察を行い、ミルクの濃さ、飲ませる間隔を考慮して母親や家族に指導するようになった。哺乳量の測定、毎時間の輸液の測定がこの頃から始められた。カロリー計算は 1 日の哺乳量より計算尺を使用して夜勤の看護婦が担当した。ちなみに病棟において乳首の消毒がミルトン液に変わり、中央材料室で哺乳瓶の消毒が行われるようになったのは、昭和 47 年の琉球大学保健学科付属病院へ移転後間もなくのことである。栄養室より調乳が配膳されるようになったのはそれより 4～5 年後のことと記憶している。（高良弘子，2004）

解説

身体の発達が未熟な状態にある乳幼児は、免疫機能も未熟な状況にあり感染症は命の脅かしに直結している。当時、未熟児が多かったという状況で、治療の一貫として手術療法が行われるようになった。児の全身管理として、衛生面や栄養面などに重点をおいて看護を行ったことは注目に値する。何故なら、1960 年代までは、輸液セットの作成から滅菌までを看護職者が担っていたという時代背景がある。当時の医療現場の状況や乳幼児の身体発達の特徴を考え、感染の問題を重要な問題として考えていたことが伺える。未熟児が多かった当時に、児の衛生面や栄養面に働きかけ母親に教育を行ったことは、感染の問題を入院中のみの問題とせず、日常生活の根本問題として捉え母親や家族に教育指導したものと解釈できる。（名城一枝，2004）